

日本赤十字九州国際看護大学学術情報リポジトリ

タイトル	赤十字の看護の発展に向けて
著者	浦田喜久子
掲載誌	日本赤十字看護学会誌, 6(1) : pp 16-19.
発行年	2006.03
版	publisher
URL	http://id.nii.ac.jp/1127/00000334/

<利用について>

- ・本リポジトリに登録されているコンテンツの著作権は、執筆者、出版社(学協会)などが有します。
- ・本リポジトリに登録されているコンテンツの利用については、著作権法に規定されている私的使用や引用などの範囲内で行ってください。
- ・著作権に規定されている私的使用や引用などの範囲を超える利用を行う場合には、著作権者の許諾を得てください。
- ・ただし、著作権者から著作権等管理事業者(学術著作権協会、日本著作出版権管理システムなど)に権利委託されているコンテンツの利用手続については各著作権等管理事業者に確認してください。

Ⅳ. 赤十字の看護の発展に向けて

浦田喜久子

今回のシンポジウムのテーマであります「今、改めて問う赤十字の看護とは」は、日本赤十字社の看護部長である私にとりまして、最も重要な課題です。それは、これまでの歴史をどう継承し、どう発展させていくかに責任を負っているからです。日本赤十字社は、組織として約130年、看護師養成事業については115年の歴史を有しています。この歴史からなにを学び、なにを残し、なにを変化・発展させていくのか、赤十字看護事業の戦略をたて、実践していくことが必要です。

まず、赤十字の看護を考える前に、看護を提供する人材の育成、つまり看護師養成の歴史を紐解いて見たいと思います。日本赤十字社は、明治23年から救護看護師の養成を開始いたしました。その目的は、戦時救護と災害看護ができる救護看護師の養成でした。創設期は、まだ社会において看護師は低い地位にあり、専門職としての教育もなされていない時代でありましたので、資質の高い看護師養成のために大変な努力がなされています。「篤志看護婦人の会」を発足し、有栖川宮妃殿下をはじめ、有志の貴婦人らが自ら看護を学び、看護の仕事の尊さを身を持って示し、看護師養成に直接尽力しました。また、学校教育には、F・ナイチンゲール看護学校より養成規則やその他看護教育に必要なものを取り入れ、教育の二大目標を「人間形成(赤十字人づくり)」と「専門職業人」として、看護教育を行っています。看護技術や赤十字事業はもちろん、他の学校にはなかった修身や体操、唱歌、裁縫などの教養科目の設置や赤十字の精神が日常生活にも生かされるよう寄宿舎生活を義務づけるなど、赤十字の人づくりに力が注がれたことが窺えます。また、看護婦外国語学生制度や、社会看護婦、看護婦長候補生の教育など、当時他にはない制度を先見性を持って創設・実施しています。これらのことが今になってどれだけ看護師の資質及び看護の質の向上に貢献してきたか、はかり知れません。

以上のことを振り返ってみますと、先人たちは、常に、①先見性を持って、どのような状況の中でも②開拓・創造し、組織の理念を実現できるよう③赤十字人としての人づくりに力を入れ、求める

最高の質を確保するため、④確実な実践力を培ってきました。私は、この4つのことは、赤十字の看護の歴史から学ぶこととして、これからも受け継いでゆかねばならないことと考えております。

平成10年より、医療の高度化・専門分化、看護学の向上等に対応するため、より質の高い看護師養成の必要性から看護専門学校から大学における高等教育への移行を目的として看護教育施設の再編成を進めています。現在、看護教育施設の設置状況は、専門学校22校、助産師学校1校、日本赤十字が養成委託している学校法人赤十字学園が運営する看護大学5校(3校が大学院を併設)、短大3校となっており、平成19年には専門学校が17校になる予定です。大学に移行しても、本来、赤十字が看護師を養成する目的を見失わず、建学の精神である「人道」の精神をカリキュラム全般に生かし、赤十字人としての人づくりと国内外で活躍できる看護専門職者としての育成が重要です。そのために、昨年度から本社において大学・短大の先生方と赤十字教育の検討を行っております。ここでは、赤十字概論や災害看護論、日本赤十字社救急法、国際看護論など赤十字に関する科目とともに、災害救護訓練、ボランティア活動など体験学習等から学ぶことの重要性と赤十字教育の充実のための方策等について具体的に検討いたしました(表1、2、3、図1)。

特に、赤十字は、世界的な組織であることを考

表1. 赤十字看護大学・短大における赤十字教育

赤十字看護大学・短大における赤十字教育とは、赤十字の基本理念である「人道」を理解し、その実践を日常化し、将来、赤十字の基本原則に基づいた看護実践や国内救護及び国際協力・救援等の活動ができる基礎的能力を養う教育である。

表2. 赤十字看護大学・短大における学科目

赤十字科目とは、赤十字教育を中心として構成される4つの学科目群である。

- * 「赤十字概論に総称されるもの」
 - * 「災害看護論に総称されるもの」
 - * 「国際活動に総称されるもの」
 - * 「日本赤十字社救急法・家庭看護法・水上安全法・幼児安全法」
-

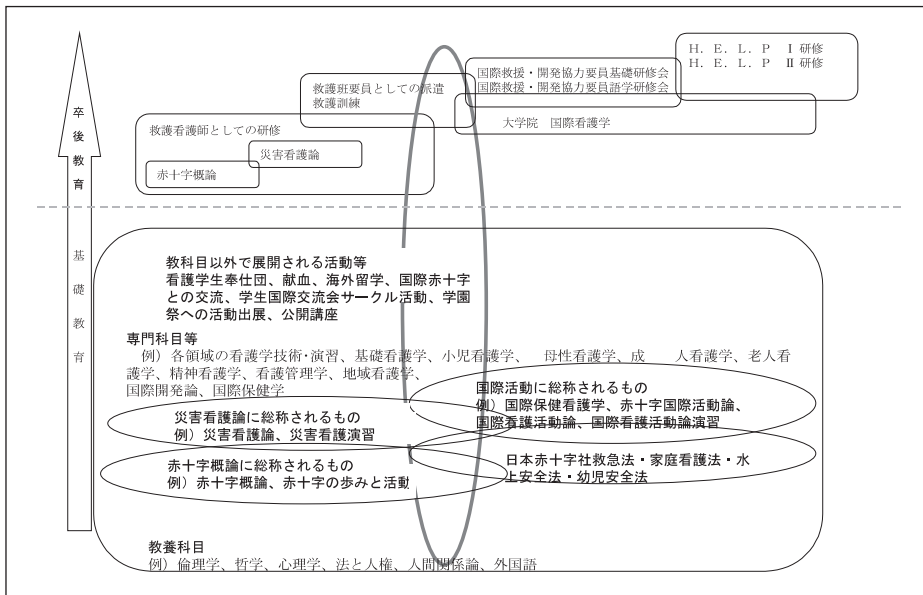


図1. 赤十字教育のイメージ

表3. 課外活動等の授業以外で展開される赤十字教育

- * 赤十字教育においては、授業科目以外のボランティア活動等、学生生活の中で実施されている諸活動も重要なもののひとつである。
- * 赤十字の理念の具現化は日頃の実践活動を通して経験される。特に、学生自らが赤十字の一員として赤十字事業に参加することの意義は大きい。

え、国際的な視野を持ち、国際活動ができるような人づくりが重要であることが強調されました。このことは、平成16年度の「日本赤十字社の今後

のあり方に関する有識者調査（日本赤十字社に対する国民の意識と今後の対応に関する研究会：代表 京極高宣）」において、赤十字看護大学・短大及び看護専門学校の今後のあり方、方向性について、「国際的な保健活動への取り組み」、「看護学生によるボランティア活動」に期待する意見が5割を占めたことから、赤十字に対する社会からの期待と一致します（図2）。

また、最近の看護に期待されるものは、人々の権利を尊重した、確かな技術に基づく安全、安

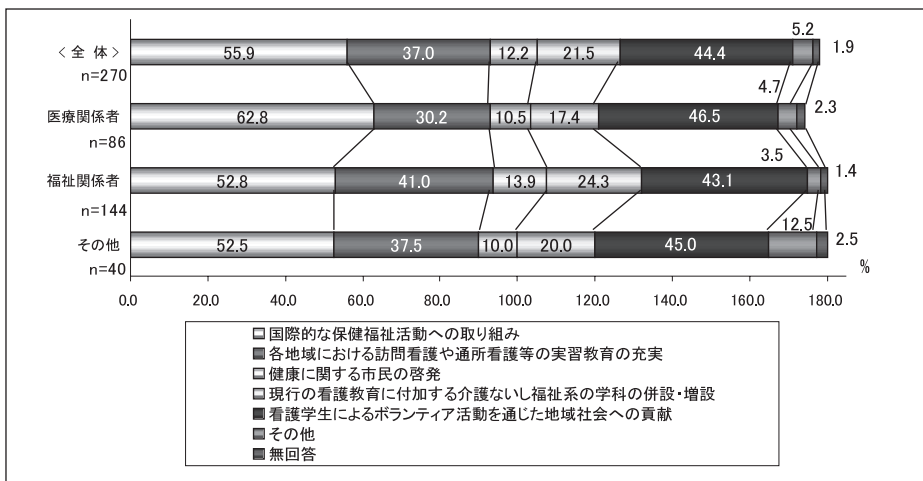


図2. 「日本赤十字社に対する国民の意識と今後の対応」意識調査

(日本赤十字社に対する国民の意識と今後の対応に関する検討会：代表 京極高宣氏)

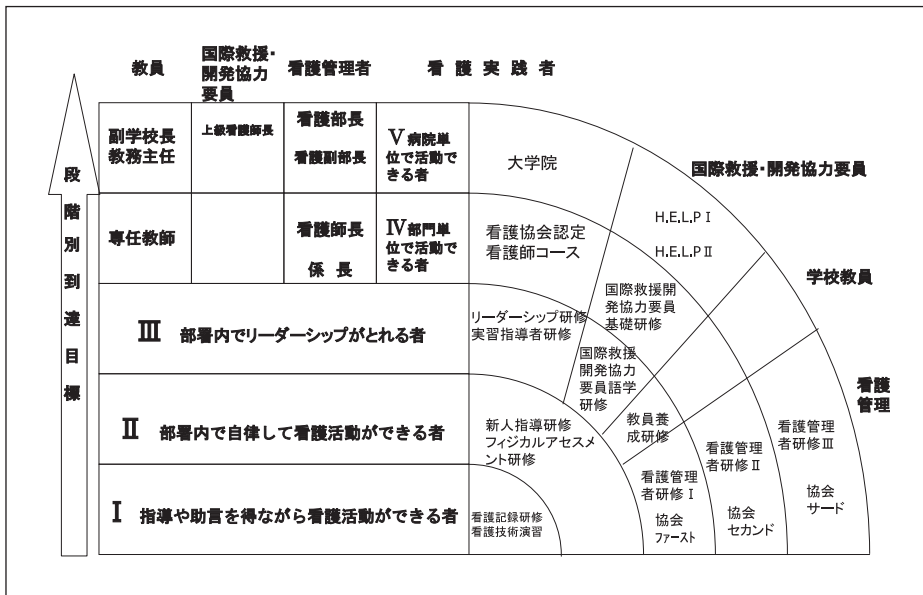


図3. 段階別到達目標と階層別研修のイメージ (案)

楽な看護の提供であり、国も重要課題として取り組んでいます。しかし、顧みますと、このことこそ赤十字が最も基本として教育してきたことであり、またこれまで、赤十字の看護が信頼されてきた所以であろうかと思えます。私どもは、改めてこのことを再認識、あるいは、意識化して教育または看護実践を行っていく必要があると考えます。

そういった意味で、本社看護部では、昨年度より、「赤十字の看護師の看護実践能力向上に関する方策」を検討しております。赤十字の看護師一人一人が「赤十字の看護」といえる看護が提供できるような仕組みを作りたいと考えています (図3)。この検討会には、日赤看護大学の先生方にも委員になっていただいております。これは、大

学の持つ蓄積・研究された知識と実践の融合を図り、EBNに基づく看護の提供を促進するためです。赤十字は現在、5つの大学の他、既述の教育施設を有しています。このことは、赤十字にとって大きなグループメリットになり、医療施設と教育施設におけるユニフィケーションをすすめることが、両者ともに質の向上を図っていくことになっていくと思っています。また、幹部看護師研修センターに、本年より看護部長職に必要な研修を追加いたしました。幹部の養成は、将来の赤十字のありようを左右する大変重要な教育です。赤十字の看護を発展させていくことの出来る管理者を育成したいと思っています (表4)。

最後に申し上げたいことは、赤十字全体の連携を強化することによって、それぞれの力を終結し、

表4. 看護管理者研修の教育目的

看護管理者研修Ⅰ
看護係長としての責務を認識し、組織的看護サービスを追及できる組織作りのための能力を拡大する
看護管理者研修Ⅱ
組織の理念を具現化した組織づくり・組織運営のために、看護師長の役割を独創性・創造性をもって遂行できる実践力を培う
看護管理者研修Ⅲ
赤十字の理念を基本とした組織の発展に寄与するための高い看護管理実践力とトップ・ネージャーとして魅力ある幅広い人間性を培う

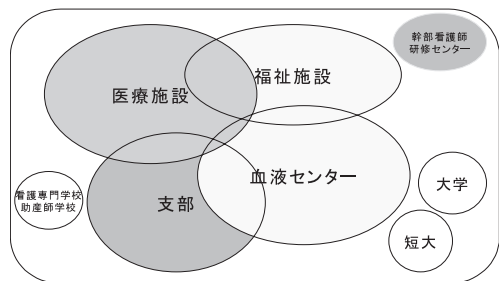


図4. 赤十字のグループメリットを活かした質の高い保健医療福祉サービスの提供

更なるパワーを強化し魅力あるものとしていくことです。赤十字が持つ医療施設、福祉施設、血液センター、支部、教育施設には、約3万人の看護師が働いています。現在は、保健・医療・福祉の連携の時代と言われ、一体の方向へと進んでおります。赤十字の看護師が一致協力していけば、かつて赤十字が時代のパイオニアとしての役割を果たしていたように時代の先駆者として役割を果たしてゆけるものと考えています。これからも、赤

十字の看護の強みを形づくり、社会にチャレンジし続けていきたいと思いません（図4）。

